２０２４年４月２８日　青戸教会　「たとえ憎まれても」
聖書　エゼキエル書３６章２４～２８節、ヨハネ福音書１５章１８～２７節　　高橋克樹牧師

この世に生きるかぎり苦難や苦しみから逃れられないところがあります。人生において、苦難や喪失の出来事が人に苦しみや悲しみの感情をもたらすのはなぜか。それは、私たちが世界を獲得の視点からとらえているからです。獲得のほかにも、進歩、回復、成功と言ったポジティヴな価値観で人生を思い描くことがイコール幸福だという無意識の先入観があります。もし人生をこのようなポジティブな側面でしか評価しないならば、苦難や喪失といったネガティブな経験や出来事は不条理なものになってしまいます。けれども、それはハイデガー風に言えば、この世の物差しによって自分を理解する習慣がみについていることの反映なのです。時代精神の価値観を自分の価値観として取り込んでいるだけなのです。

先週、教団出版局からレターケースが届いて、何かなと思って開いてみたら、２０１５年に信徒の友に書いた私の原稿を再録して、何人かの方の原稿と一緒にして、苦難に立ち向かうことをテーマにした信仰入門書を出したいということでした。１０年近く前の原稿なので、内容は忘れていたのですが、そういうことも書いたな、ということを思い起こしたわけです。もちろん、転載はオーケーしたわけです。

その中で、どうして人生に苦悩が起こるかという原因について、当時の私の考え方が書かれていました。それは、私たち近代人が日常的に自己決定的に生きているために、少しでも自分の予定や計画がとん挫すると、苦悩に襲われてしまうということです。自分が主体的に生きていくということは、自分が自己決定しながら生きていくことだという大前提があります。けれども、世の中で生きていくとき、何もかも自分の思い通りに行くわけはないことは頭ではわかっているのに、いざ自分の計画や思いがとん挫してしまうと、思いっきり悩んでしまう。どうしてか。それは、今の世の中で大前提になっている自己決定的に生きるということが、自分らしさを発揮することだし、自分の人生を立派に生きることにつながるという考え方が無条件に受け入れられているからです。言うならば、自己決定的に人生を選択しながら生きていくというのは、私たち近代人の骨の髄までしみ込んだ思考なのです。いわば、そういう時代精神に私たちはとりこまれているのです。

本日の聖書を見てみます。１９節に『あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである』とあります。この個所を、自己決定的に生きることが時代精神になっていることとの関連で読み直してみると、自己決定的に生きることはこの世の価値観と矛盾しませんから、今の時代精神は、そういう自己決定的に生きる人間を身内として愛することになります。だが、主イエスが自己決定的に生きる生き方から脱却させて、神の意志に従う生き方へと招いたために、つまりは、この時代精神から選び出したので、この世はそういう神に委ねた生き方を選択する者を憎むことになるというのです。このように読解してくると、１８節の『世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい』と主イエスが言った意味も了解できます。主イエスは神の支配が既にこの世に来ていることを、病人の癒しや奇跡的な業を成すことによって、人々に知らしめていたのです。しかし、律法学者やファリサイ派の人たちは、自分がいかに律法を守っているかによって、その実践の業の積み重ねによって神の憐れみを独占しようとしていたのです。いわば、律法を楯にとることによって自己実現を図っていたのです。罪人や徴税人たちとは違って、自分が律法を守っていることが当時の時代精神に合致している生き方だったのです。罪人や徴税人はたとえ律法を守るような生き方ができたとしても、それは最初から律法を守っても何も意味がない人たちだという決めつけによって、当時のユダヤ教社会の時代精神に沿うような生き方は絶対にできないと決めつけていたのです。そういう決めつけによって、たとえ、律法学者やファリサイ派の人たちが自分たちに十分に律法を守れないような事態が生じたとしても、そもそも律法を守ろうとしてもできっこない人種がいるのだという社会的な差別意識の固定化によって、自分たちに都合のいい安全弁をつくっていたのです。

けれども、このような差別は神の御旨から見るならば、なんの意味もなさないのです。１９節から２０節にあるように、当時のユダヤ教社会の時代精神に沿わない生き方をする者をユダヤ教社会は憎むし、迫

害するというのです。しかし、そのような事態は『わたしをお遣わしになった方（＝神）を知らないから』（２１節）起こることなのです。主イエスがこの世に来て、神の支配が既に現わされていることを具体的に発言し、御業をもって明らかにしたのにもかかわらず、律法学者やファリサイ派の人たちはいつまでたってもユダヤ教社会の時代精神にしがみついているために、主イエスは自分がこの世に来る以前は『彼らに罪はなかったであろう。だが今は、彼らは自分の罪について弁解の余地がない』（２２節）と発言して、いつまでもユダヤ教社会の時代精神に沿った生き方をして、神の慈愛が律法的な行為に先んじて人々に分け隔てなく注がれていることを認めないために、彼らは罪に定められていると言うのです。

川島先生の追悼礼拝の際にも申し上げたのですが、この世的にどれだけ業績を残したとしても、社会的地位を手に入れたとしても、キリスト者の価値を決定するものは、そのような個人の業績や社会的な地位ではありません。自分が神に生かされていく中で、神がその信仰者をどのように用いたかというが決定的に大切なのです。神の御業がどのように、その信仰者を通して現わされたのかが、故人を振り返るとき、決定的に重要なことなのです。

ヨハネ福音書９章冒頭にある「生まれつきの盲人をいやす」の記事で、弟子が主イエスに「生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」と問うた際に、主イエスは「神の業がこの人に現れるためである」と答えていることからも、そのことがわかります。神の支配が実現しつつあるこの世において、神は信仰者を用いて神の意志を具体的に現わすのです。しかし、その時代精神が律法学者やファリサイ派のように、強く個人の生き方を拘束していると、最初に申し上げたように、自己決定的な自分の生き方がとん挫してしまうと、苦難が突然襲ってきたかのように受け止めてしまうのです。けれども、皆さんも経験的にお分かりのように、順風満帆のときは意外と自分を顧みることがありません。逆に、自分が思い描いていた計画がとん挫したときに苦難に出逢うことで、より自己理解が深まることを私たちは経験的に知っているのです。不可解な出来事の中に、実は神の御業が現れると言ってもいいのです。

「苦痛の棲み処を見ていない者は、世界の半分しか見ていない」という言葉があります。苦難や喪失に直面したとき、私たちはそれらを自分のものとして同化できません。持て余してしまいます。ですから、それ洛南や喪失の悲しみに気づかないように振舞ったり、見ないように感情にふたをすることで、苦痛や悲しみを回避しようとしてしまいがちとなります。確かに、そのような回避行動をとれば、一時的には心と魂の痛みは遠ざけられるかもしれません。

けれども、苦しみや悲しみが自分を超越していることに気づくことができないので、それら自分に都合の悪い事態を、神の摂理として受け止めることができません。神の御旨は不都合な出来事になかに隠されていることが多いのです。私たち信仰者も。自己決定的に生きているので、苦難が自分を超越しているという認識を持つことがなかなかできません。しかし、苦難を経験することで「人間を超える力に自分を委ねた」信仰者が形成されることで、苦難が自分の人生を中断させたものとして、人生から排除する対象として忌み嫌う対象にするのではない道が開かれてくるのです。苦難や喪失の出来事は、自分の人生のキャンバスから消し去りたいものです。でも、苦難や喪失の悲しみを神に担っていただいていることを知った者だけが、それらの出来事が実は自分の人生に欠かせない神の御業が働いた刻印だということに気づくことが許されているのです。別の言い方をするならば、苦難や不幸によって、私たちは人間の力ではどうすることもできない「他者」に直面しているのです。自分が背負いきれない苦難や不幸もまた自分の中にある他者なのです。しかし、この他者を抱え込むことができなければ、自分の人生を肯定的にとらえることはできません。さらには、この他者を抱え込む営みがあって初めて隣人愛への道も拓かれていくのです。

私たちは自己決定的に生きているようであっても、他者と孤立して生きているわけではありません。自分の中に多くの人が生きているからこそ、自分という人格が形成されているのです。自己は他者の塊です。同じように他者の中にも自分が生きています。ですから、苦難や不幸を神による御業の一つとして肯定的に自分の人生に組み込むことができれば、神の支配の中に生かされた人生だと肯定することができるのです。そして、たとえこの世から憎まれても、自分の人生を舞台として、神の御業が苦難や不幸を通して働いたことを覚えることができるのです。